

# 語るBe・語り部

## 【山形県支部PEインタビュー】第3回

### 丸山 修【農業】編

#### I.はじめに

山形県支部ではこれまで技術士の取組んできた技術についての発信の場をつくること、そのノウハウおよび技術士の資質などを読んで学べる資料を残すことなどを目的として、PE インタビューという事業を実施しております。第3回として実施しましたので報告します。

日時：令和6年11月29日(金) 13時30分～

場所：株式会社ケンコン会議室

対象者：丸山 修（農業部門）

STAFF：広報委員会 伊藤信生、加藤友之

オブザーバー：須藤勇一、安達公一



写真 1. インタビューの様子

#### II.インタビュー

##### 1.学生時代

(司会)

少年時代から学生時代までのお話しをお聞かせください。

(丸山)

私は、昭和22年に3人兄弟の末っ子として、米沢市で生まれました。戦後のベビーブームの第1期生です。このため同学年の人数は非常に多く、小学校は市立南部小学校で一クラス50余名の6学級で300人以上、中学校は市立第2中学校で一クラスは50余名の10学級で500人以上という生徒数でした。小学校はもちろん中学校もクラスメートの

数が多いことから、顔と名前はほとんど覚えてはいません。

高校は、米沢興譲館高等学校で、同学年で一クラス50余名の6クラスで300名以上という生徒数でした。高校の同窓生でも顔と名前が解らない同窓生が多いように思われます。ですから、たまに知らない人から（私が解らないだけですが）「丸山じゃないか？久しぶり」と声をかけられますが、誰か思い出せず、対応に苦慮することがあります。

(司会)

最終学歴で農業土木を選んだ理由をお聞かせください。

(丸山)

私の少年時代は、現在ほど物が豊富な時代ではなく、かなり質素な生活を送っていたと思います。特に私の家は、北朝鮮からの引き上げ家族だったので、普通の家庭よりも質素な生活をしてきたような感じがします。

そうした中で、高校時代は食べ盛りなので、やはり食べるものが潤沢にある世の中がいいのではないかという思いが強く、食べ物＝農産物＝農学部という単純志向で農学部を選択したように感じています。

私の高校は3年の時に文系と理系のコース分けが行われますが、あまり勉強が好きでなかったので、数Ⅲから逃れてラクしたいという思いから、文系のコースを選びました。

農学部に入りたいという思いがあったので、大学の受験科目を調べたら、農学部は理系なので数Ⅲが受験科目にある大学が一般的でした。

それで焦りまして、片端から農学部を有する大学の受験科目の範囲を調べて行ったら、宇都宮大学農学部が数ⅡBで受験可能ということを見つけまして、関東の大学だし、家からもそんなに遠く離れるわけでもないの、ここだったら親も反対はしないだろうと思い、受験することに決めました。

学科の選択については、宇都宮大学の農学部には

6学科がありましたが、その中で農業開発工学科という名前の学科があり、開発工学という名前の響きがよく、単純に学科の名前から、もしかしてうまくいけば「東南アジアや中央アジアにでも行って活躍できるかも」というこれも単純な思いでこの学科を選択して受験をしました。



写真 2. インタビューの様子

## 2.就職後

(司会)

卒業後の進路(就職)を決めた理由をお聞かせください。

(丸山)

私たちの年代の大学時代は、学生運動の最盛期の時代で、特に、東大全共闘や日大全共闘による闘争が有名でした。

そうした社会的状況は、関東の地方大学においても例外でなくその影響下に巻き込まれており、大学の占拠、閉鎖などが繰り返し行われ、あまり勉強したという記憶がありません。

4年生になり、就職活動の時期に入り、米沢に帰ってのんびりと仕事をしたいと思い、地元の山形県庁の採用試験に応募しました。私の学科には山形県出身者が私を含めて3名いましたが、その中で、自分が一番、出来が悪いと自覚していましたので、「ダメで元々、落ちたら落ちたで考えることにして、一応受けて見よう。」と思ったわけです。

就職を担当している教授が心配して、「ある企業に世話をやるから、そちらを受験して見ないか」と声をかけていただいたりして、大変ご心配をおかけしたことを今でも思い出します。

山形県に採用が決まってからは、卒業に向けて追試、追試の連続で、応用力学などは2年生で取る単位ですが、なかなかうまくいかず、最後は研究室で教官と二人きりで試験を受け、ようやくゲタをはか

せていただき単位を取得したことを今でも懐かしく覚えています。

(司会)

就職後から現在に至る経歴をお聞かせください。

(丸山)

昭和46年に酒田市にある庄内支庁産業経済部最上川右岸農業水利改良事務所の勤務を振り出しに、36年間農業土木職員として各地域で仕事を担当させていただき、平成17年3月に58歳をもって山形県を退職しました。

現在、農業農村整備事業を行う県の組織は、基本的に県庁及び総合支庁という組織体制ですが、それ以前は、県庁及び地方事務所、それにプラスして土地改良事務所という出先機関により構成されていました。私は、県職員としての勤務の大部分が土地改良事務所において県営事業を担当してきた、現場一筋の人生だと思っています。

県職員を退職後、2年間のブランクを経て、平成19年6月に縁あって「株式会社ケンコン」に入社し現在に至っています。

## 3.印象に残っている仕事

(司会)

印象に残っている仕事を教えてください。

(丸山)

管水路の水理計算に苦勞した日向川地区県営かんがい排水事業、昭和50年の最上災害で被災した石名坂頭首工の災害復旧事業、酸性土壌の要因となるパイライト対策が求められた沼の倉地区県営農地開発事業などが印象に残っています。

(司会)

あえて、ひとつに絞るとしたらどれになりますか。

(丸山)

沼の倉地区の県営農地開発事業です。技術士受験における体験論文のテーマとして取り上げた仕事でもあるからです。

沼の倉地区での仕事は、農地造成に伴い、酸性土壌の要因となるパイライトの地層が出現したことに対する対策工事に取り組むことでした。

農地造成により地表に露出したパイライトを含む地層が強酸性土壌を作り出した結果、畑面保全として播種したマメ科の牧草が全滅するという被害が発生したわけです。

沼の倉地区は、リンゴの生産団地を造成する事業

で、この年に造成を完了し、翌年度は植栽を行い事業完了となる計画で、この地区も残された期間は2年間という厳しい状況でした。

このため、根群域の深い樹木の植栽に対して、どのような土壌改良の工法を採用するか、そして、如何にして造成工事の施工と平行にして土壌の酸性度を確認しつつ、土壌改良を進めるかということで、大変難儀をしたことを覚えています。

話はそれますが、技術士試験の口答試験で、2名のうち1名の試験官にこの体験論文に関して厳しい意見をいただきました。「西日本では2~3年前にパイライトについてはすでに問題になり対策が進められてきました。それを知らないで、いままで何をしてきたの…」など、きつい口調でいろいろ言われました。最後に「一般に田や畑などは地表から20cm程度の浅い土壌を対象としていると思いますが、りんごの木という根群域の深い(60cm)ものをテーマとしています」と回答しました。いろいろ厳しく言われたのは今でも忘れませんが、こんな思いをするんだったら、技術士試験を受けるのはもうやめようと思いましたが、無事合格することができました。

#### 4. 技術士資格について

(司会)

技術士資格取得のきっかけについてお聞かせください。

(丸山)

年齢的に50歳に届くころに、自分の中で、「自分は技術吏員として県に入り、20数年間技術者として農業土木の仕事をしてきたが、自分は技術者と言えるのだろうか?」、「技術者としての力量はあるのか、あるとすればどの程度なのか」という疑問が沸き上がりました。当然、それに対する答えなどは出しようがなく、何となくモヤモヤとした日々を過ごしていたある日、職場の同僚が昼休みの時間に技術士受験関係の本を読んでいました。私は恥ずかしながらその方に「技術士とは何ですか?」と聞いたところ、驚いたような顔をして、「え! 貴方は技術士が何たるかを知らないの?」と言われ、それからの昼休みの45分間は、その方から技術士資格に関して説明を受けました。

これをきっかけに、自分なりに技術士資格に関して調べていくうちに、「なるほど、自分が日頃から

疑問に思っている技術者としての力量を知るためにも、ぜひこの試験を受けてみよう、試験に落ちたら落ちたで自分の力量がわかるだけだから」と思い受験することにしました。

(司会)

技術士資格の取得についてどのようにお考えですか。

(丸山)

以前、学会の博士、実業界の技術士が産業界を背負っていくふたつの車輪と言われましたが、そのとおりだと思います。

また、資格は若いうちに取るべきだと考えています。私の所属していた県では、当時ベテランになってから技術士を取得するという風潮がありました。本来、資格は若いうちにとって仕事に生かすべきだと思います。



写真3. インタビューの様子

#### 5. 山形県農業土木技術士会

(司会)

山形県農業土木技術士会の概要について教えてください。

(丸山)

本会は、農業部門(農業土木、農村地域計画、農村環境)の技術士と技術士補を中心として、平成25年に発足しました。会員相互の研鑽と技術水準の向上を通じて、技術士制度の普及と技術士の地位向上を図りつつ、農業・農村整備事業の発展と農業土木技術者の技術の向上に寄与するとともに、会員相互の親睦を深めることを目的としています。

具体的な活動(事業)として、農業土木技術者の技術士資格の取得支援、農業土木関係団体と連携した研修会や講演会を開催しているほか、会員相互の情報ネットワークを構築し様々な情報提供などを行っています。

(司会)

本会は丸山さんが中心となって設立されたとおっておりますが、いきさつなどについて教えてください。

(丸山)

設立のきっかけは、平成 24 年の東北農業土木技術士会の総会において、当時の会長から、「各県の農業土木技術士の活動に対し、5万円程度の支援を考えている。」という旨の話があったことです。以前から、山形県にも農業土木の技術士が相互に連携し活動できる場を作りたいと考えていた私にとってこの話は「渡りに船」であり、年5万円の助成が受けられるのであれば組織を立ち上げようと考えました。さっそく組織作りに取り掛かったところ、運良く12名の方から賛同を受けることができました。

ところが、翌年の東北農業土木技術士会の総会の場で会長から、「各県の農業土木技術士会への助成に関しては、色々と問題が提起されたので取り止めになります。」との話が出され、大変驚きました。私としては農業土木技術士会の設立に向けて準備してきたわけですし、活動資金としてあてにしていた5万円がパーになったわけですから、心の中で、「それはないだろう。去年あれほど自信ありげに話したのだから、今さら取りやめるといことはおかしいのではないかと若干の怒りを感じたことを覚えています。

しかし、農業土木技術士として技術的課題に対する意見交換の場を作り、技術の向上と研鑽を図ろうとする考え方に少なくとも12名の方が賛同してくれたということを考えると、「声かけをした自分の立場としては今さら止めるわけにはいかない」という思いが強く、「他人の金で物事を成し遂げようとする考えはやはりダメだ。5万円はあきらめよう！設立に向けた資金については自腹を切れればいいだけのことだ。」と自分に言い聞かせ、平成 25 年 10 月に「山形県農業土木技術士会」として私を含めた13名の会員で本会はスタートしました。設立以来、会長を務めさせていただきましたが、昨年(令和5年)10年という節目を迎えたことを期に、会長職を退任させていただきました。

(司会)

これからの山形県農業土木技術士会に期待することは何ですか。

(丸山)

会員数の増加、特に若い会員が増えることに期待しています。会員数が増加することにより、農業土木技術の発展や技術士会における農業土木技術士の地位向上などにつながっていくものと考えています。現在の会員数は20名ほどですが、最低でも30名くらいまで増えてくれればよいと思っています。

そのためには技術士試験に合格してもらう必要がありますが、若い方にどんどん挑戦してほしいと思っています。

## 6. 日本の農業の将来

(司会)

日本の農業の将来への憂い、期待などについてお聞かせください。

(丸山)

私が一番危惧しているのは食料自給率の問題です。私は、戦後の食糧不足の時代に生まれ育った人間です。声高に言わないだけで、コテコテの食糧安論者であると思っています。

ロシアによるウクライナ侵攻の影響により、日本の産業構造の脆弱さ、特に農業に関する脆弱さが再認識されています。食料自給率の低下を防止し、一定の自給率を国内生産により確保できる生産体制を作り上げていくことが重要ではないかと考えています。

それと同時に、農業が産業として将来においても持続することができる、儲かる農業の展開も重要なことだと考えています。そのためには、農業者自身が企業の経営者としての意識を持ち、生産性の向上を図るとともに、いかに利益を生み出すかという観点に立った農業経営を行うことの必要性が求められていると思います。そして「安ければいい」というわけではなく、生産に要する経費と適正な利益を反映した安定的(適正)な価格形成を農業者が享受できる仕組み作りが必要ではないかと考えています。そのために、私たち農業土木技術士として考えなければならないことは、農業が将来にわたり産業として成り立ち、持続可能な農業の生産体制を下支えすることができる技術を維持・発展させることであると理解しています。

## 7. 趣味

(司会)

ご趣味をお聞かせください。

(丸山)

大変恥ずかしいことですが、趣味というものはありません。無趣味です。

## 8.若い技術士に向けて

(司会)

若い技術士に対してご意見をお願いします。

(丸山)

技術士は若いうちに取得するのがベストです。技術士の資格は単なる名誉のための資格ではありません。社会のために有意義な技術を実践するための資格です。つまり、働き盛りの時に役立てるための資格なのです。そして、前回の「語る Be・語り部インタビュー」の中で元会長の安彦さんが、「技術士の資格取得はゴールではなくスタートラインに立っただけです。」とおっしゃっていますが、私もまったく同感です。技術士になれば、自分の技術力を維持・向上させるため、更なる努力が必要となります。私自身に対しても、そして多くの技術士の方々に対しても「共に己を磨き、更なる高みを目指して頑張りましょう」というエールを送りたいと思います。

## 9. 日本技術士会山形県支部に向けて

(司会)

日本技術士会山形県支部に向けて一言お願いします。

(丸山)

技術の進歩や発展は、ある日突然生じるものではなく、日々の継続した技術の積み重ねにより可能となるものであると思っています。それは「昔の技術体系が今の技術体系を作り、今の技術体系が未来の技術体系を作り出す、まさに一本の糸のようにつながっているものである」という認識に立っているからです。

この「一本の糸」を途切れることなく紡いでいくためにも、技術士同士がお互いの技術的意見を交換する場、自分の考えを述べることのできる場として、本県支部活動に大きな期待を寄せているところです。

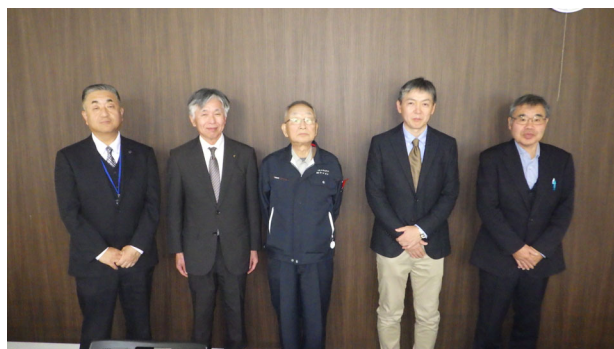


写真4. 左から加藤氏、須藤氏、丸山氏、伊藤氏、安達氏

## 10. 最後に

(丸山)

今回、この依頼を受けた時は、正直面倒だと思っていましたが、書いていくうちに自分の人生を振り返ることができ、大変有意義だったと思いました。ぜひこれからも続けていってほしいと思います。

## 略歴

### 丸山 修 (まるやまおさむ)

山形県米沢市出身、県立米沢興譲館高校卒業

昭和 46 年 3 月 宇都宮大学  
農学部農業開発工学科卒業

昭和 46 年 4 月 山形県入庁  
平成 12 年 6 月 技術士登録

(農業部門：農業土木)

平成 17 年 3 月 山形県を退職

平成 19 年 6 月 株式会社ケンコン(技術顧問)～  
現在に至る

### 【その他】

平成 16 年～平成 23 年 山形県技術士会理事

平成 23 年～平成 30 年 日本技術士会東北本部  
山形県支部幹事

平成 25 年 10 月 山形県農業土木技術士会会長  
令和 5 年～現在 山形県農業土木技術士会顧問

